

# 福德思想の発生と吉祥への願望

宮 本 又 次

## 一、福德思想と金銀尊重の想念

福德円満をこいねがい、福祿寿をよろこぶ意識は江戸時代の町人社会ではとくに強くなり、芸能・美術・工芸にも多く、これを主題とするものがあらわれ、またこうした画題を特に注文して、画人にかかせることが、一般化していたし、それは今日にも及んでいるだろう。

こうした風潮は室町末期頃からとくにあらわれている。町衆の成立はまさに「浮世」といわれる世界に対応するもので、「洛中洛外図屏風」にあらわれている世界であった。もとより「うき世」は古く古代末期から「憂き世」として意識されてはいた。人の世の無常を悲しむ思想は早く「万葉集」の時代にまで遡りうるであろうが、平安末期の浄土思想の発達、出家の流行はこれを表現していた。この世は不浄の相、無常の相を持つ穢土<sup>えど</sup>であり、百福厳浄の浄土とは対立するところであった。穢土を脱して往生浄土をもとめるところに出家の現象があらわれた。厭離<sup>おんり</sup>さるべきこの世はまさに「憂き世」でなければならない。

しかしこの「憂き世」にも変化が生じた。南北朝の動乱を経て、世は正に下剋上の代となり、俄大名・成り上がりものの世相、「浮かれて歩く」色好みとなる。「憂き世」は「浮世」に置きかえられ、「当世風」「今様」となり、大福長者があらわれ、拝金宗が台頭し、現実肯定の意識が出てくる。

造天龍寺船の派遣によって、足利将軍の懷中には少くとも五千貫文の収入がはいったであろう。その富を誇るべく北山<sup>ろくおんじ</sup>鹿苑寺の一角に金閣を構築した。日本国王臣源道義として、義満は明国の成祖永楽帝から「日本国王の印」と永楽という正朔<sup>せいしよく</sup>を与えられる。天龍寺船の外、細川船も畠山船も外に出て、金銭が流

## 福德思想の発生と吉祥への願望

入する。

時代は下って東山殿義政は銀閣を建立する。義政は尊氏創建の西芳寺(苔寺)に到り、その一角にある西来堂さいらいどうに注目した。この達磨大師西方より来るの意をもつ西来堂に対し、東山殿は東求堂をたてた。西芳寺の林泉には池中に蓬萊島があり、池中の夜泊石よどまりいしは蓬萊島に渡る宝船をあらわしていた。

金閣は西園寺家の北山殿きたやまどのの寝殿造りを改めて仏閣とし、その外面を金箔で塗ったものであったが、東山殿の東求堂は書院造りであり、北山殿は円池、東山殿は心字池しんじのいけである。極楽をかたどった楼閣を彼岸として、此岸から拝するのが金閣であり、銀閣の方は銀箔をわずかにはって、人の休むべき建物としている。金閣は朝日にはえる黄金をめぐる庭であり、東山殿は月光を浴びるものであるが、ともに金銀を尊重しているところは時勢粧をあらわしている。

室町時代がすでにして金銀尊重と銭づかいの世代たることを物語っている。

「福」「大福」は元来中国渡来の思想で、天の助け、神の庇護をその内容としていた。うん・運・命運は「運否天賦」(うんぷてんぷ)で、運のよしあしは天の定め与えるものとの考え方があり、運次第、運は天にあるものであった。

ところが仏教思想の影響で、善行をつめば福を得られるであろうとの考え方が生れ、福德・大福德・福幸こう・福幸さいけい・福楽・福禄といわれ、鎌倉時代にはこうした語があらわれている。「源平盛衰記」には清盛のことをのべて、「官職福禄何事かは心に不叶事ありし」とある。禄は「かつけもの」で、褒美ほうびの意味にもなるし、富にもなる。「徳」も「得」に通じ、「富」や「利」の意にもなる。

こうして室町期には「僥幸きやうこう」の語があり、縁起物にうつり、江戸時代には福神、七福神の絵姿が出来上る。

福草履・福茶・七神銭・福引・大福帳と福をつけることをよろこぶようになる。

「因果応報」から「果報」の語が生れ、法華経などの経典によって「果報」をめたいた、幸運と考えるようになる。「前世こうに行った業の報い」の意味になる。この場合「幸運」をさすが、不運は「ぶかわほう」「無果報」となる。因果も因果者とい

うときは不運となる。「大果報」「果報者」となって、めでたい限りになる。「運報」ともいい、自力で運命をきり開くのではなく、神仏の加護と助力によって「運報」となる(『愚管抄』)

狂言「箕潜」に「貧福は自然の物なり。果報は寝て待てといふことがある」とあるように、目に見えぬ神仏の助力によって、冥々の中からの加護が加わると考える。冥加に浴した結果が「みょう利」(冥利)である。

自然に随順することになるが、ところが自らの力で不運から立ちなおる。「禍を転じて福となす」とか「禍は幸い」とする自助の考え方も生じてはいる。

## 二、吉田兼好の「徒然草」と拝金思想

少し年代は前になるが、鎌倉末期の吉田兼好の「徒然草」にはこうした時勢粧がすでに表現されている。「徒然草」には出家しようにも、それになりかねる兼好の苦悩の表現がある。そこには濃厚な世俗性がうかがえる。そこには古き世を慕い、今様を卑しいとする遁世の思想がある一方、もっと現実的で、色の浮世を忘れかねないものがある。

兼好は「人の<sup>かくよ</sup>樂欲する所、一には名なり。二には色欲。三に味ひなり。万づの願ひ、此の三つには如かず」と語り、色欲については「<sup>しど</sup>止め難きのみぞ、老ひたるも、若きも智あるも、愚かなるも変る所なしとぞ見ゆる」と称して、如何に厭離し難いかを示している。「物洗ふ女の脛の白さ」「手・足・<sup>ひふ</sup>膚などの清らかに肥え膏づきたらん」のには官能的な誘惑を感じざるを得ない。兼好はまた「万づにいみじくとも色好まざらん男はいと肅々しく、玉のさかずきのそこなき心地ぞすべき」と語る。兼好は「好き女」との仮初の恋のあわれを、問題とし、また「物のあわれは秋こそ増されと人ごとに云ふめれど、それも然るものにて、今一<sup>きわ</sup>際心も浮き立つものは春の景色にこそ有<sup>ある</sup>めれ」と春に浮き立つ心を説く。

兼好は大福長者の心理を描写して、第一に現世主義でなくてはならぬ。無常観などはもっての外である。第二禁欲でなければならぬ。第三に拝銭宗でなければならぬ。第四に恥ずかしめられても怒ったり恨んだりしてはならぬ。我慢

## 福德思想の発生と吉祥への願望

をすることである。第五に正直にして約束を堅く守らねばならぬとする。このように現実的な拝金思想を表明している。

兼好は大福長者の言葉として「人は万づをさしおきて、ひたぶるに徳をつくべきなり。貧しくは生けるかひなし、富めるのみ人とす」とのべる。(第117段)

まず、富める人のみが人であり、貧者は生くる甲斐なしとし、「徳をつかんと思へば」その心づかいを修行する。その心とは「人間常住の思いに住して無常を観ずること無く、また万事の用をかなふべきものに非ず」とのべている。

「欲にしたがひて志をとげんとおもはば、百万の錢ありといふとも、しばらくも住すべからず 所願はやむときなし、財はつくる期あり、限ある財をもちてかぎりなき願にしたかふこと、得べからず、所願心にきざすことあらば我をほろぼす悪念きたりと、かたくつつしみおそれて、小用をなすべからず」

「錢を奴のごとくして つかひもちふる物としらば、なかなか貧苦をまぬがるべからず。君のごとく、神のごとくおそれたふとみて、したがへ用ふることなかれ」

錢を大切に、浪費をつつしみ、自己の欲望をつつしむべしと語っている。

更に「正直にして約をかたくすべし、此の義を守りて利を求めん人は、富の来る事、火のかわけるにつき、水のくだれるにしたがふがごとくなるべし」と正直を堅く守ることが、蓄財の根本的条件であるとしている。

しかもこのようにして蓄財をなし得たにしても「錢つもりて盡きざる時は、宴飲声色をこととせず、居所をかざらず、所願を成ぜざれども、心とこしなへにやすくたのし」として、宴飲声色をつつしみ、住居を質素にし、浪費を防げば永遠に安らかであるとしている。(第217段) このように、大福長者の所感を写した形でのべているが、兼好はこれにつづけて「そもそも人は所願を成ぜんがために財をもとむ。錢を財とする事は願いをかなふるが故なり。所願あれどもかなへず、錢あれどももちひざらむは全く貧者とおなじ」として、専心に蓄財のみをはかっている守錢奴の心は貧しいものであると罵倒し「何をか樂とせん。此おきてはただ人間の望をたちて、貧をうれふべからずと聞えたり、欲を成してたのしびとせんよりは、

しかじ財なからんには」として「大欲は無欲に似たり」との心境を表現している。

しかしまた「或る大福長者の云はく」として大福長者の処世観を詳しくかいているのは注目すべきであろう。「寸陰をしむ人なし。これよく知れるか、愚なるか、愚にしておこたる人のためにいはば、一銭かろしといへども、これをかさぬれば貧しき人を富める人とす。されば商人の一銭ををしむ心切なり。刹那おぼえずといへども、これを運びてやまざれば、命を終ふる期忽ちいたる。されば道人<sup>どうじん</sup>はとほく日月を惜むべからず。ただ今の一念、むなしく過る事ををしむべし(第108段)」としている。一銭を惜んで、これを重ねると貧人もまた富者になり得ることを教えている。

もちろんまた他方において兼好は財多きものが、身を守るために一生を苦しめているのを冷笑してはいる。「名利<sup>みょうり</sup>につかはれて、しづかなるいとまなく、一生を苦しむるこそ、おろかなれ、財おほければ身を守るにまどし、害をかひ、わづらひをまねくなかだちとなり、身の後<sup>のち</sup>には、金<sup>こがね</sup>をして北斗をささふとも、人のためにぞ わづらはるべき。おろかなる人の目をよろこばしむるたのしみ、またあちきなし。大きなる車、肥えたる馬、金玉のかざりも、こころあらん人は、うたておろかなりとぞ見るべき、金は山にすて、玉は淵になぐべし。利にまどうはすぐれておろかなる人なり」(第38段)

また地位をのぞむことは財を求むることとともに愚かなるものであると批判している。「うづもれぬ名をながき世に残さんこそあらまほしかるべけれ」として、愚鈍の人物もよき家に生まれ、時にあえば高位にのぼり、奢りをも極めるが、また賢人聖人でも ただそれだけでは低い地位に甘んじなくてはならないとする。

第93段で兼好は牛の売買に関して 牛をうるもの、買う人あり、明日その価をやりて牛をとろうと約束し、その夜の中に牛が死んだ。買わんとする人に利あり、売らんとする人に損ありと語るを聞いた。牛の主は損ありというも、また大利あり。生あるもの死に近きことを知らず、はからざるに牛は死に、はからざるに主は存している。一日の命万金よりも重しとし、「万金を得て 一銭を

## 福德思想の発生と吉祥への願望

失なはん人損ありといふべからず」としている。ここにも当時における拝金思想への皮肉がある。

しかし兼好は生死の問題を論じつつ、矢張銭の価値に比喻をもとめている。

「されば死をにくまば、生を愛すべし。存命のよろこび、日々にたのしまざらんや。おろかなる人、此の樂をわすれて いたづがはしく、外のたのしびをもとめ、此の財を忘れてあやうく、他の財をむさぼるには志満ることなし、生ける間 生をたのしまずして死に臨みて死をおそれば この理あるべからず。人みな生をたのしまざるは、死をおそれざる故なり、死をおそれざるにあらず。死の近きを忘るるなり。もし又生死の相にあづからずといはば、実の理を得たりといふべし」とのべている。

兼好は出家した法師であり、また転落公卿であつて、超世俗性をもっていながら 他面において拝金思想をもっていたのは、矢張その世相を反映したもので、鎌倉末期の大富豪の出現、中国銭の流通現象と無縁ではないであろう。仏教信仰によって、大福とはいわれても、矢張長者である金融業者の出現であるから、まさにこのことを示しているであろう。

また京の人間と田舎の人間を対比させて、京の人間のあり方を肯定している。都会性の価値を認めている。そこに何らかの近代性が窺えるであろう。

兼好は陰遁の聖者にも、世捨人にもなり得ず、現実の不安な生活を克服出来ないで、その時代に生起したさまざまな現象をそのままに反映している。金銭の崇拜もこうした時代感覚をもったものと思われる。

### 三、金銀財宝と浮世観

室町期には「浮世」なる言葉が多く使われるようになる。謡曲もまたきわめて多く「浮世」なる言葉を使用しているが、その「うき世」はもはや厭離さるべきものではなく、絵巻物のように浮世の諸相が展開されている。つれなき浮世と謡われても、そこには人の世の常として恋や利欲や煩惱が渦まいている。

それより先に、千秋法師によって初春の寿詞をのべる千秋万歳せんすまんざい（千寿万歳せんじゅ）

## 福德思想の発生と吉祥への願望

が家々を巡りあるいていたし、<sup>くせまい</sup>曲舞、猿樂があり、翁舞がおこり、禍除的な呪術的所作をなしていた。翁は長命を祝い、三番叟は<sup>そう</sup>豊饒<sup>ぎょう</sup>を祝い、父尉は繁栄をことほいだ。翁は文殊菩薩、三番叟は<sup>みろく</sup>弥勒菩薩、父尉は釈迦だともいわれたが、この三役に延命冠者という一役が加わってくる。

室町時代に能は大成するが その中には「鶴亀」のようにふんだんに金銀財宝を謳歌する詞句がもられている。「鶴亀」には「庭のま砂は金銀の<sup>たま</sup>珠を連ねて敷妙の五百里の錦や瑠璃の<sup>とほそ</sup>枢<sup>しゃこ</sup>、碑礫の行桁、瑤瑤<sup>はし</sup>の階、池の汀の鶴亀は蓬萊山も外ならず」とある。

「羽衣」には仏の誓願円満に国土に成就して、天より七宝の宝を充滿して降下すとある。「御願円満国土成就七宝充滿の宝を降らし、国土にこれを施したまう」とあるが、この七宝は金銀・瑠璃・<sup>しゃこ</sup>碑礫・瑤瑤・真珠・玫瑰をいう。また迦陵頻伽という極楽世界に住むという、美声妙音の鳥が出てくるが、これは天上界の鳥である。羽衣の天人は天冠をいただくが、それには鳳凰が立っている。

能には<sup>かつこ</sup>羯鼓が使われるが、これは中国の楽器で、元来は軍鼓であった。戦闘の開始の第一声や進軍のとき叩くものであった。しかしのちにはその上に鶏をのせている。鶏は時刻を知らせる鳥であるが、平和になって、<sup>かつこ</sup>羯鼓を叩く必要がなくなり、その上に鳥が翼を休めることが出来る。軍鼓の必要がなくなって泰平であることを示している。「カンコドリが鳴く」という俗語は店が閑散で客が来ないことをいうが、もともと泰平の象徴で、めでたいことをあらわしている。武器<sup>えんのう</sup>偃納のあらわれである。

「能」から「狂言」になると更に商取引そのものをあつかっている。「雁大名」「どもり」「連尺」「牛馬」など世相をうがっているし、「河原新市」や「鳥帽子折」などもそれである。「鳥帽子折」は金賣吉次が弟吉六と共に高荷という大荷物をもって奥羽に下る筋である。「狂言」には為替のことも出ている。「鬼の槌」「打出の小槌」には金銀珠玉米銭への願望があらわれる。

更に「閑吟集」や「室町小歌集」では現実の肯定が強くあらわれる。室町初期の「狂言小唄」は対話形式で、労働と密接に結びついた人々の感情が直截に出てい

## 福德思想の発生と吉祥への願望

るが、都市に入り、町衆の手によって育てられた「室町小歌集」や「閑吟集」は「狂言小歌」のように自己の運命を悲痛に訴えず、もっと享樂的になっている。それはもはや農民の労働歌ではなく、愛欲と現世謳歌の感情を露呈している。この傾向は近世初頭の「隆達小歌」にいたって、極度に押し進められる。

「閑吟集」を見れば「夢さへ見果てぬ味気なの浮世」「<sup>いん</sup>槿の花の上なる露の世」「浮世は風波の一葉」としながらも、それにはもはやこの「夢の浮世」を脱しようとするものではなく、「夢のゆめのゆめの、昨日は今日の古<sup>いにしへ</sup>へ、今日は明日の昔」といわれている。今日一日のみを頼んでいるのである。瞬間の人世に意義をもとめている。「何せうぞ くすんで、一期は夢にただ狂へ」「かかるはかなき世を現と住むぞ迷ひなる」、また「よし名の立たば立て、身は限りあり。いつまでも」というような小歌があげられる。もはや常住の世界を遠くにもとめず、今日一日の興奮を近くにもとめるようになる。

「浮き世」を「憂き世」として否定される心意は、いまや「浮世」を「夢の浮世」として肯定していく心根に変ってくる。それこそ「当世風」であり、「今様」であると観ぜられる。

ここで「御伽草子」の出現を顧みなければなるまい。元来「御伽草子」は南北朝の内乱によって古代権力を倒して中央に進出して来た足利武士が自分達の農村に伝えられていた民話をもとにして、古代貴族の智識をもとり入れて形成したものであるが、そこには町衆の意図が動いていたと見ねばなるまい。

たとえば「一寸法師」は成り上りものが、貴族の姫君をついにめとるという出世物語だし、「文正草子」や「<sup>かに</sup>猿蟹合戦」も庶民の出世物語に外ならぬ。こうした着想は御伽草子以前には見られない。土一揆や下剋上や、町衆の台頭が「御伽草子」に反映している。

「文正草子」では民衆の「文正つね」が貴族にみそめられて、大納言にまでなっている。

「福富草子」は室町中期の作で、もっとも古い本、秀武という老人が妻にすすめられて道祖神に祈り 放屁の珍芸を会得して長者になる。その隣にすむ貧しい



福富はそれを習い、中將の家に赴くが、失敗して糞をまきちらしてさんざんにうちのめされる。御伽草子にはあまり武士は出て来ないし、出て来ても「俵藤太物語」とか「御曹司島渡り」という風な弱い武士で、神仏の加護によってのみ生きているし、「鶴の草子」を見ても地頭が鶴のところへ攻めていって 鶴の<sup>へんげ</sup>変化に悩まされて、やっつけられている。御伽草子にはつまり貴族的なものと庶民的なものが混在していたといえよう。

これがやがて近世的な「浮世草子」にまで発展していく。

御伽草子を生み出した基礎が京や堺にあり、同じく絵を対照とする場合でも、武士的な絵巻物に対し、それは庶民的な「奈良絵本」といえるであろう。

桃太郎の物語も蓬萊島を攻めて赤鬼青鬼を討ち従え、金銀瑠璃、珊瑚を持ち帰り、神仙思想からする不老不死の蓬萊島も、この段階では金銀銭、福德を得る場所になっている。

蓬萊島は中国の思想では人間界の外にあって、不老不死、不増不減の仙域であり、東西南北の四方と天上とが この理想境を設定しており、東海にある扶桑<sup>ふそう</sup>国<sup>こく</sup>をあてる。四周が海でかこまれ 松柏<sup>しょうはく</sup>の常緑樹が茂り、千寿万歳の長寿が保たれる。鶴亀の霊鳥霊物の住む所であり、東王父、西王母などの神仙や子の高赤松という仙人が住んでいる。福寿円満永久不変で 桃花が常に咲いて、落花<sup>ちようよう</sup>凋葉はない。億兆不易不変、不老長寿の桃源境である。蘇我馬子はこの蓬萊島を造立し、大津の円城寺にもそれについての遺構がある。平安時代には京都の勧修寺、東寺末の神泉苑 嵯峨の大沢池にその倣をのこしている。神泉苑は神仙苑の転訛であろう。しかし平安中期以後には阿弥陀信仰が隆盛となって、これにかわり、造園の場合 西方にある極楽浄土の構築に変わる。御堂関白道長の法成寺は阿弥陀の御堂を中心とする浄土の庭園になる。

そして更に南北朝となると奇石珍木の石庭となる。そして宝島より帰航した宝船が碇泊する姿を池の中につくる。生命の永劫を示す蓬萊島は、石庭になると金銭財宝の宝島にかわる。池中の島も鶴島・亀島を双置するものになる。醍醐寺三宝院の庭の池には鶴島亀島がある。

## 福德思想の発生と吉祥への願望

そしてこの段階になると 蓬萊島から出てくる鬼は打出の小槌をもって、それを振ると金銀七宝がザクザクと打ち出されるものになる。そして鬼の女房になったり、鬼の子をあずかる女房のことなどが狂言に仕組まれるようになる。

「鬼の継子」がこれで、里へ帰る女が路に迷い、印南野で鬼につかまり、鬼の女房となり、鬼の子の子守をさせられ、やがて鬼は蓬萊島に帰っていく。

古くから南方はわが民族の夢であり、ユートピアであった。古くは海彦・山彦の海神宮があり、やがて浦島伝説となって、龍宮となる。龍宮は「安齊随筆」(故実双書)には琉球の二音の転化とし、「夢の代」もそれを琉球としている。古代の常世国・蓬萊国に相通じている。神女・不死・長生・天仙・蓬萊山の神仙思想の影響をうけている。俵藤太伝説では湖底に龍宮を想定している。朱楼紫殿の欄干・楼門・楼閣は金・銀・瑠璃・玉をもって形容されている。いずれも異国、エキゾチックな珍品でかざられている。金の砂・玉の石畳の景観はわが民族の理想郷となる。蓬萊も「山海経」に「蓬萊山在海中上有仙人之宮室皆以金玉為之鳥獸盡白望之如雲在渤海中」とあり、これは中国の神仙思想にいで、海中にあるものだろうが、これを日本化し、常世国と混同し、富士・熱田・熊野とし、あるいは台湾と仮定したりしている。蓬萊の描写も金銀・瑪瑙・琥珀の楼閣と風光よりなり、龍宮とあまりかわりがない。

桃太郎の鬼ヶ島も、鬼はみな裸で、南方系のものらしく、蓬萊島も鬼との関係がつく。

狂言「鬼の槌」には蓬萊島から来た鬼が隠れ蓑と隠れ笠と打出の小槌をもって日本へ来たとある。鬼が辰市の繁昌を見物し、市で馴染になった二人の男から酒をのまされ、酔うたあまりに隠れ笠と隠れ蓑をこの二人にかす。二人は蓑と笠で姿をかくし、鬼のもっていた打出の小槌をも盗もうと争う。鬼は一酔して目をさまし、そんな横道な心では槌をふっても宝は出まい。槌をどちらにやっても恨むから、小槌は鬼の手に納めておこう。その代り子々孫々まで富貴繁昌に栄えるようにと宝物を打出してやろうとあって、小槌をふると、金銀・珠玉・米銭が湧いて出る。二人も家に帰り、鬼もこれまでなりとて「蓬萊島にぞ帰り

ける」となる。

蓬萊島が金銀珠玉の土地であることは前代とかわりがないが、この頃から鬼が蓬萊島の住人となる。そして鬼はもはや人間に災害を与えるものではなく、反って福德を与えるものと見なされるに至る。これも黄金思想のあらわれである。

この頃の宝は江戸時代になって「宝盡し」なる絵模様になる。また種々の宝物の象を集めてかくものである。そのとりあげるものは次の如し。

如意宝珠・宝鋤(吉祥天女の)打出の小槌・金囊(大黒天の)・隠蓑・隠笠・丁字(異邦の黄金の形)・花輪違(円形に方孔あり、錢であろう)、また鍵玉・蓑・丁子・七宝・袋・槌子などである。為朝が鬼が島へ渡ったときの「うきぐつ」も珍重されている。

このころ蓬萊を飾った「島台」が案出され、鯛・海老・勝栗・ほんだわら・昆布・熨斗・鮑などが選び出される。

鶴亀や長寿の翁媼・尉と姥が姿をあらわす。年号にまで文亀とか元亀とかいって、万世平和の瑞兆として亀が幅をきかせる。

この時代の年号を見てもいかに徳・禄が願われていたかがわかる。

この室町時代には「正」や「文」の文字が多い。正慶・正平・正長・康正・寛正・文正・永正・天正であり、文和・延文・文中・文安・文正・文明・文亀・天文である。また「徳」と「禄」が多い。建徳・永徳・至徳・明德・享徳・宝徳であり、長禄・享禄・永禄である。徳は道德の徳であるが、有得をも示している。「徳」よりも「得」である。

#### 四、黄金尊重思想と吉祥

平家の六波羅政権は宋との貿易に志向した。東北の北上川でとれる砂金を馬につんで京都におくる。この砂金を宋へおくる。その代りに渡唐錢銅錢が流入する。唐物もはいる。そのため貨幣づかいがはじまり、私鑄錢もます。こうして鎌倉の後期から南北朝になって錢による取引が盛んになる。銅錢の流入は

## 福德思想の発生と吉祥への願望

日本の砂金の見返り物資だが、日本が黄金国であると喧伝される。マルコ・ポーロの「東方見聞録」がそれで、金で屋根をふいた宮殿 例えば奥州平泉の金色堂があげられる。京都宇治の白川に金色院が建つ。平等院の奥の院である。それはやがて義満の金閣、ついで義政の銀閣につらなっていく。

そして戦国時代になり 金銀涌出が記録に多く出るようになる。甲州の金・佐渡の金・石見の銀・生野の銀が出る。そして信長・秀吉による金銀尊重がめだってくる。

信長の父信秀は四千貫を朝廷に献じている。信長は僧沢彦のすすめで、天下布武の黄金の印をつくり、朱印状におしている。足利義昭のために経営した京都二条城の邸には貼金の瓦をおき、伊勢両宮へ二千貫を寄進し、岐阜の蔵にも、安土城にも多額の金銀をたくわえていた。貴金属尊重の精神はすでにあらわれ、これは秀吉によって進められ、所謂桃山風となる。信長は後藤判と墨書した、あるいは刻した金貨を鑄造した。秀吉は信長と同様に重金思想をもち、伏見桃山城は金色燦爛としていた。鉱山の開発につとめ、大阪金蔵に多額の軍資金を貯蔵し、千枚分銅金という大法馬の金地金をつくる。天正末年には天正菱大判金を鑄造した。天正17年5月聚楽第南門二町余に台をならべて、金銀2万6千枚、その金高36万5千両を積んで、公卿や一族諸将に分配した。「大閣の金賦」である。外国貿易の保護もなす。金銀尊重、その派手ごのみは目をみはるばかり。秀吉の死後、その霊をなぐさめるため豊国祭の風流踊があり、享樂的な風流踊は京都のみならず、各地で行われ、天文21年の奈良での町中惣踊には町中の金欄が全部売切れてしまうほどであった。

家康は金座・銀座・銭座を設けて貨幣を発行し、寛永通宝も発行される。金銀銭づかいが次第に盛んとなる。金銀山の開発にもつとめる。

信長の「天下布武」の金印は、武すなわち「戈」を「止」めることであった。平和泰平を示し、小田原北条氏の印文は「禄寿應穩」を印文とし 三河の徳川家康は「福德」の印文を用いたという。

元和偃武ののち、寛永文化の華彩があらわれる。京都の公家と町人の文化が

## 福德思想の発生と吉祥への願望

花咲く。俵屋宗達の工芸・本阿弥光悦の風雅、詩仙堂の石川丈山、八幡松花堂の昭乗らの文運、角倉宗庵、茶屋四郎次郎父子、灰屋紹益、住友政友、そして西陣の繁栄がある。京都には各藩の呉服所職務職種の御用所があり、宮崎友禅斎による加賀友染、あるいは純黒の檳榔染などがあらわれる。

鎖国体制にはいつて、枠にはめられた身分的節度がおおいにかぶさっても、なお寛文・文禄期にはもりあがる商品貨幣経済の進展があり、浮世肯定、享樂への志向があつて、「御伽草子」の世界から「浮世草子」の段階になってくる。島原・新町の遊廓がさかえ、歌舞伎踊は歌舞伎劇になり、操り人形は浄瑠璃と結びついて義太夫の曲にのつて演出される。西鶴や近松の文学、談林の花がさき、岩佐又兵衛や菱川師宣による「浮世絵」、宗達より発展した光琳の華麗、団十郎の芸事と坂田藤十郎の艶治、水木辰之助の踊り、かくて元禄の活気がくりひろげられるが、やがて減速経済となり、デフレに向う。

江戸時代の年号には寛の字を用いたことが多い。寛永・寛文・寛保・寛延・寛政の如し。寛恕を理想としていたことがわかる。また文治政治をも理想としていた。その証據には寛文・元文・文化・文政・文久など文をつけたものがある。しかもなお財産・禄寿をこいねがう心根もあつて、宝や禄や永をつけたものが多い。延宝・元禄・宝永・宝暦・安永・嘉永などだし、延をつけた延享・寛延・万延もある。

福禄寿への願望も強かつたわけである。

やがて町人は地道化し、才覚や思い入れを主とすることよりも算用や始末を心がけ、奉公や体面や知足安分を念とするに至る。「うえなみそ」「あるべきよう」に向うが、それでも町人達になお拝金・金銀尊重・蓄財の心意は失せたわけではない。

そして吉兆・吉祥をこいねがい、福德円満を理想とする。消極的になればなるほど、こうした念願は強くなる。

吉祥は「きちじょう」とも「きっしょう」ともいい、めでたいきざし、前兆で「吉上」ともかく。吉瑞(きちずい)「祥瑞」ともいう。

## 福德思想の発生と吉祥への願望

吉兆は「きっちょう」で、これもめでたいし、「吉きざし」である。大阪の十日戎の売物は吉兆と小宝であるが、大阪では「キツキョウ」というよりも「吉慶」に近い発音をしている。「キツキョウ」である。

「はぜ袋に取鉢、銭かます、小判に金函かねばこ、立烏帽子、米箱さい槌、たばね熨斗」なども、めでたい好画題として使われるようになる。これは大阪の西宮の十日戎の唄で、その賣り物の名を一わたりならべたてている。

はぜ袋は砂金を入れる袋で、中にははぜ麦をいれてすっている。はぜは爆で「糯米の穀を湿して、煎りたるもの」「爆ぜ脹れて、自ら脱し、白くして雪花の如し、乾菓子かの種とし、また魚を養う餌とす」と「言海」は説明している。煎ると脹れるので、ふえることを祝うた意味である。

黄紅の紙で、その形を造ってある取鉢は両替屋などで口分けした金銭を盛る浅い木皿である。銭がまずは銭をいれて蓄えるはである。ははもと藁蓆にて作り、穀菜などを入れる袋だが、ここでは銭を入れる袋である。米箱は米ことも謡うている。さい槌は小さい木槌で、工作用のもので、これを買った人は夷祠の背後にあるはめ板を力まかせで打って帰る。強く打つほど援かる福も大だとの迷信からで、祠の板も厚い檜板を張ってあるが、それでも破れるという。束熨斗は普通の熨斗である。俚謡にはこの句「あげこ・子宝・束熨斗」とある。揚こは取りこともある。子宝は俵・鍵・帳面などの総称である。はぜ袋以下、みな張子細工で作って、これを笹に結びつけてある。もちろん祠では子宝のみを売って、笹は商人が売っている。「毎年の吉兆、毎年の子宝、買うていきなはれ」と大声でどなっている。それはともかく当時において「吉兆」とする財宝が何であつたかを、如実に物語るものといえよう。

## 五、七福神信仰

七福神信仰もまた室町時代になって結成された信仰であつた。書軸の神仙人物などの意匠を得、また竹林の七賢人など中国の着想にならい、あるいは仏家の「仁王経」の「七難七福」「七難即滅」「七福即生」の教句から日本・中国・インド

の神々の混合物をつくり出したものであろう。これは神とも仏とも区別のつかぬものである。「狂言」にはすでに恵美寿・大黒・福祿寿・布袋・寿老人・多聞天・弁財天の七福神が出ている。七難七福の仏教思想による幸運財福の神であらう。

毘沙門天はインド起源で、もとは武神、中国で訳して多聞天となる。もと四天王の一つ(北方)で、単独で崇拝されていた。インドでは薬叉の大將、仏法では護法神、のち福德の神となる。悪魔を除かんため金甲をつけている。兜跋(とばつ) 毘沙門天は特にあがめられ、足に藍婆、毘藍婆の二鬼を左右に踏み、右手に三叉戟、又は宝棒(宝珠)をもち、左手に宝塔を捧げ、怒眼をみひらく、畏猛の相がある。着ている甲冑はイラン系のものという。

狂言に「連歌毘沙門」がある。ある男が心易う嘶す男と初寅の日に鞍馬山の毘・沙門に参詣する。途中「鞍馬を信仰致してより此方、何事も富貴富貴と吹きつけられるように思ふが」と問われ、「仰せられる通りで、毘沙門天を信仰致す故に何事も思ひの儘で御座るからといよいよ信心が弥増します」と答えている。鞍馬参詣の御利益は福德をうることである。かくて毘沙門天は財宝を援ける神と信ぜられるに至る。

妙音弁才天は水神で、もとは妙音の神、音楽の神であった。しかしこの頃から財の神となり、弁財天となる。元来はインドの神で、のち能與總持智慧集大弁財天といい、一切衆生のために愛福を援け、無上菩提にいらしめたまう。七福神中唯一の女性である。「蓮華一味經」「弁財天經」などにある財施というのにもとづいて弁財天となる。

福祿寿は道教の神たる天の三星、福と祿と寿をあげている。福寿と封祿の神だが、福ももとは寿命を意味した。この頃から財産の意味をもつようになり、三字を合している。童顔長頭の異装の中国人を標示している。

寿老人は南極老人で、星の化身として寿命を司る神、あるいはこれを太上老君すなわち老子とする。中国の道教によって伝えられ、わが国では白髯明神に配すこともある。

## 福德思想の発生と吉祥への願望

布袋和尚は中国明州奉化縣の徑山寺<sup>けいざんじ</sup>の契此という僧侶。実在人で、長汀布袋和尚と号した。弥勒の再生として慈愛の福神となる。

布袋・福祿寿・寿老人は道教と仏教の絵書「道釈画」にかかれ、現実を超越した不思議の世界を構成し、中国では人間よりも一そう自由で、ほとんど不死の神仙的存在として悠々の生活をしていると信ぜられていた。

唐以前ではこれらが第一の絵題となっていたが、次第に主流を離れて山水・人物・花鳥にかわる。元来超現実的・呪術的であったが、日本へ来てからは現実的なものになる。

大黒天は梵語で魔訶迦羅<sup>まかきやら</sup>で、自在天の化身として、三宝を愛し、五衆を護り、黒色忿怒形の天部・胎藏界の最外院に摂せられる。もとはインドの婆羅門の神に属した。二つの系統があり、一は黒闇の神として荒い性格をもつもの。二は西方諸大寺の食厨の柱側 または庫に祭られた天神神像である。

仏教伝来とともに九州の太宰府に渡来したのは、この第二のもので、厨房の神、一切の貧窮な衆生に大福を与えると共に、戦いの神でもあった。「大黒天神経」には「一切貧窮無福の衆生のために大福德を与えんがために今優婆塞<sup>うばそく</sup>の形を現す」とある。もとは長身で、恐ろしい顔をしていたが、忿怒の形相顔をしており、足下に地神・女天をふまえており、室町時代にはむしろこうした性格の菩薩といえる。もとインドでは戦の神であったが、中国に来て土地の神・農業の神となり、天台の伝教大師が比叡山を開いたとき山に住む3千の宗徒の食糧をまもる神として、天台系寺院にてまつられる。厨房の神、台所の神として、次第に庶民化する。豊作を祈る神ともなる。室町時代になると日蓮宗がこれを取り入れ、一般に普及する。米俵の上に立ち、大きな袋を背に持っているものになり、出雲の大国主神と混合される。大己貴<sup>おおなむち</sup>の字音が大黒に近いたためであろう。そして大黒も短身となり、温和な相貌となる。大国主神が袋を背負っている姿にもてくる。

これは夷三郎を事代主命としたのと同様で、神仏両部合体の結果、仏家の垂迹説によるものである。



戎は夷で蛭である。海辺人・エゾであろう。外来神で「あづまえびす」はまた「たけきえびす」であった。海神として、のち航海の神、市の神となる。「えびす」には大国主命の第三子、事代主神ことしろぬしがみをあてるが、これによって俗説では三郎ということになり、夷三郎の字をあてる。

大国主神も事代主神も天孫民族からいうと外神ということになる。そこで、別に諸冊二神の三子蛭子命をあてる説を生じる。芦船に入れて流され、棄てられた蛭子は、西宮鳴尾の浜に漂着したという。

平安時代夷と三郎とはまだ別の神とも考えられていた。夷は本地毘沙門天、三郎は本地不動明王で勇猛な戦いの神・軍神であって、武士が信仰した。石清水・日吉・北野・竜田の諸神社や東大寺などでも並祀されていた。

三郎殿は後世の夷像になる。もと夷の方は俗体でも魚をもっていなかった。西宮神社はもともと大国主神をまつていたが、ここに三郎殿が合祀されるようになる。三郎殿は大国主神の三子で釣を業とした事代主神と考えられるようになる。むしろ武神としての大国主神と釣をなし、漁業にあたっていた事代主神とが併称されて、エビスといわれるに至る。武士と漁人がこれを信仰する。両者を合併して夷三郎となって一神となる。そしてその由来は忘れられ、むしろ不具で海に流された足のわるい蛭子命をあてるようになる。

鎌倉時代の初めには硫黄島で夷三郎をまつる神社があり、船乗りが海路の安全を守る神としてまつる。そしてやがて航海交通より商業の神となる。ところが神仏習合の結果、大国主神は大黒天信仰に合一してしまう。大黒天が夷の機能をもかねるようになる。

打出の小槌ももと夷のもちものであったが、大黒天のものになる。そして鯛をつる姿になる。鯛はめでたい。そこで厨房の神でもあるし、福神にもなる。蛭子とかいて足の悪るい不具の神から鯛とつり竿の姿になり、濶達な、はつらつたるものがあらわれる。風折烏帽子に狩衣指貫を着て、鯛を脇にはさみ、釣竿を肩にしている画像は働き手の精力家をあらわしている。

夷・恵比須だけが、若干の神仏習合はあるにしても、本来からいって七福神中、

## 福德思想の発生と吉祥への願望

唯一の日本起源の神といえる。

打出の小槌は元来は蓮葉島の鬼の持ちものであったが、のち夷神の持つものとなり、更に、それが大黒天の持ちものにかわったのである。

夷(恵美寿・恵比須)は日本の起源、大黒天はインド起源、それに毘沙門天・弁財天を加え、中国宋代の「道釈画」に由来する長命延寿の福祿寿・寿老人・布袋和尚を加えて七人にしたものを共に舟にのせ、七福神舟遊の図が出来上る。いわゆる「宝船」で、これは文禄元年に没した狩野松栄直信(1529～1592)が描いたものが最古のものといわれている。

江戸時代になると大黒天・毘沙門天・弁財天を三面大黒とよび、あるいは六大黒天と崇め、まったく福德の神となる。そして町人はこれとならべて夷を著しく信仰するに至る。徳川家康も天海僧正の話で狩野某に七福神をかかせ、次第にいまのような姿の七福神とくに大黒と夷の形がととのう。吉兆・吉祥をあらわす好画題にもなる。とくに大黒と夷が福神の二大双壁となる。

また元禄頃には福祿寿の代りに吉祥天を入れたりしている。享保頃の他説では醒々を入れて寿老人とかえている。これは謡曲の醒々の影響であろう。江戸時代になって武家の式楽として謡曲が栄え、庶民層にも江戸中期には普及したからであろう。

大黒天・恵比寿・弁財天・毘沙門天・寿老人・布袋和尚・福祿寿の七人に確定するのは江戸時代の末期ではないだろうか。「江戸名所図会」にもこの七福神の挿絵がある。

そしてこの七人を有福(大黒天)清廉(恵比寿)愛敬(弁財天)威光(毘沙門天)壽命(寿老人)大量(布袋和尚)人望(福祿寿)の七福にあてる。また生殖器の象徴にしたり、神社の祭神の中から大己貴神(大黒天)事代主命(恵比寿)厳島大明神(弁財天)天穗日命(毘沙門天)高良大明神(寿老人)高島大明神(布袋和尚)猿田彦大明神(福祿寿)にあててよぶようになる。新年の宝船の絵にかき、七福神話の始まったのもこの時期からである。

大黒信仰が民間に流布したのは、民間陰陽師の流れをくむと思われる。左義

長のとき唱門師が大黒天の装をして囃したのが初めといわれる。大黒舞は室町時代からのちには鳥追いや万才と共に、正月の武家年中行事の風俗にとり入れられる。五穀の豊穰を歌う。大黒舞の徒の遊行歴訪が行われ、京都では悲田院の四カ寺垣<sup>かいと</sup>外の類が大黒天の姿を模し、面をかぶり、頭巾をきて、正月の門口に嘉祝の詞をのべて米銭を乞い、札をくばる。大阪の大黒舞は四カ所長吏の配下に属していた。

大黒舞の文句に「大黒という人は、一に俵を踏んまえて、二ににっこり笑って、三に盃さしあげて、四つ世の中よいように、五ついつもの若い者、六つ無病息災で、七つ何事ないように、八つ屋敷を押し広め、九つこ倉を建て並べ、十でとつくり納まった」とある。

夷信仰では西宮の戎神社・大阪の今宮神社その他の十日戎が名高い。戎踊も行われる。それについてはあとでまたのべる。

## 六、祥瑞と吉祥

吉祥・吉兆は町衆、町人社会に、のちには一般化して、望まれるが、もともと古代にも祥瑞としてあり、次元はちがうが、それから尾をひいているだろう。

祥瑞はもとは中国の民族的信仰で、わが国へは渡来人によって導入されたものだろう。世上に見なれぬ珍奇な事物をもって祥瑞の兆とし、あるいは凶兆とした。

太古は鹿占すなわち鹿の肩胛骨を焼いて、その亀裂を察知したが、韓土と交通以来亀卜が行われた。亀卜は亀の甲を波々迦(桜の一種)で焼いて、その亀裂を見て、真相を察知した。

養老の儀制令には、祥瑞を見るに応じ、麟鳳龜竜の類は大瑞として奏せしめ、上瑞以下は所司に申し、鳥獣の類は生獲あれば、その本性を遂げて山野に放つとある。祥瑞の発生により、その国の国司が虚実を検じ、実なれば治部省におくる。景雲・木連理は送れないので図画にして奏上すべしとある。

仁徳紀の 58 年 5 月荒陵大阪の茶臼山に木連理があった。これは最古の祥瑞

## 福德思想の発生と吉祥への願望

であった。

「延喜式」治部省の条に祥瑞の品目を列挙している。これは中国古代の伝承である陰陽五行説によっているだろう。

大瑞＝慶雲・麟・鳳・比翼鳥・神亀・神馬醴泉・河水五色など

上瑞＝白狐・白鹿・玄鶴・朱鳥・甘露

中瑞＝白雉・白雀・青熊・赤豹・玄貉・流黄出谷など

下瑞＝木連理・嘉木・黒雉・竹実満など

色は五行の色、すなわち青・赤・黄・白・黒を慶瑞とした。

そしてかかる祥瑞・奇瑞があると改元した。

大化以後奈良時代に至る、白雉・朱馬・和銅・靈亀・養老・神亀・天平感宝・天平宝子・神護景雲・宝亀・天應の年号はいずれも祥瑞による改元である。

白雉(はくち・びやくち)は「日本書紀」に穴戸<sup>あなと</sup>国司草壁連醜<sup>むらじしこふ</sup>経が白雉を献じた瑞祥による改元、下問された百濟君は漢の明帝の白雉の故事をとき、道登法師は高麗の白鹿・白雀・大唐の三足の鳥の例をひいて「休祥<sup>よきさか</sup>」と説き、祥物(さかも)と称し、賀を催し、白雉と改元したとある。

朱鳥(しゅちょう・すちょう)は私年号ともいうが、礼記に前朱鳥、後玄武、左青龍、右白虎とあるのによる。

慶雲(けいうん・きょううん)は慶雲の瑞祥による改元である。和銅(わどう)は武蔵国秩父郡より銅を献じたためによる。靈亀(れいき)は和銅8年の改元。靈亀は「易」を出典としている。

養老(ようろう)は靈亀3年11月の改元、養老の醴泉発見によるという。神亀(じんき・しんき)は養老8年2月の改元、養老7年9月7日 白亀を献上されたのによる。

天平感宝(てんぴょう かんぽう)、陸奥国より黄金の献上あり、天平21年4月天平感宝と改元。

天平宝子(てんぴょうほうじ)は駿河国より「開下帝釈標、知天皇命百息」という字を成した蚕が献ぜられたことにより改元。

神護景雲(じんごけいうん)天平神護3年8月の改元、景雲による太平に應じたもの。

宝亀(ほうき)肥後国葦北、益城両郡より白亀が献上され、これを大瑞として改元。

天應(てんおう)宝亀12年1月祥雲により改元。

その他養老7年9月7日に白亀が献上されて瑞兆としている。〔「扶桑略記」「続日本記」〕天平3年正月元旦には美作国より天皇に木の連理を献上している。

神護景雲2年7月8日には参河国碧海郡の人長谷部文選は白鳥を献じ、同年11月肥後葦北郡の人刑部広瀬女、日向国宮崎郡の人大伴人益は、白亀赤眼、青馬白髪尾のあるのを献じている。

有色のものが白色を呈するのはよいこととした。

こうした場合その図牒を勸せしめる例であったが、祥瑞図としていまに残っているものはない。しかしこうした祥瑞図はのちになっても日本画の好画題となって伝承されている。

祥瑞の代表的なものは麒麟・亀・竜・鳳凰・白雉・白鳥であって、休祥(よきさか)嘉瑞・嘉祥としてよろこばれた。古代の日本の画工は、これらの祥瑞図の唐から輸入されたものを臨画した。それが画師としての最高の修業になっていた。のち日本画家が好んでかく慶雲の模写もこうした伝来によるものである。

瀧川政次郎博士は日本画における「鯉の滝登り」も唐朝の祥瑞図に由来するとされている。

唐朝の姓は李であった。李と鯉は音通で、鯉は唐代では神聖な魚とされていた。黄河上流の激湍竜門を溯行することが出来た魚は竜になると信ぜられた。滝を昇り行く鯉は昇天して竜となる。大原にて義兵をあげた唐の高祖李淵は長安に入って帝位に上る。正にこの姿をあらわしたのが「鯉の滝登り」である。唐の祥瑞図であったが、日本にも導入されて、これを手本にして日本画家は近世・現代までかきつづけている。

麒麟は政道仁なればあらわれる理想上の瑞獣であった。麒は雄、麟は雌とい

## 福德思想の発生と吉祥への願望

われる。鹿の体に牛の尾と馬の蹄をもち、腹は黄色で、背に五彩があり、一角を有していた。

竜は古代メソポタミア、インドにもあり、中国のものは蛇・虎・馬・<sup>とかげ</sup>蜥蜴の要素をもっていて、萬物の祖といわれ、国家守護の龍王になると信ぜられた。

八大龍王があり、中国では天の北方の神玄(亀)に合せて祀っている。袞龍の袖とあるが、これは天子の礼服とされる。鱗のある蛟竜、翼のある應竜、角のある虬竜などいろいろあった。

わが国では「日本書紀」の「おがみ」を竜としているが、奈良時代には竜に関する記事はあまりない。平安朝には「竹取物語」に竜の玉をとることがある。「源氏物語」須磨の巻で、光源氏の夢に龍宮の使があらわれている。「今昔物語」巻16に蛇を助けた人が龍宮へ行って富をうる説話がある。

室町時代には謡曲に「龍虎」「竹生島」「久世戸」「海士」があり、お伽草子の浦島太郎の伝説にも龍宮は大きくあらわれる。龍宮は彦火々出見尊が海宮へ遊行されたのを浦島伝説と混和し、謡曲「玉の井」となり、更に馬琴の「弓張月」では琉球すなわち龍宮となる。

龍宮は<sup>こやさん</sup>姑射山・蓬萊山・喜見城と共にわが民族の理想郷となる。

平安時代の<sup>りゅうとうけいしゅう</sup>竜頭鷺首の舟は、へさきに竜の頭をつけ、他の一艘には鷺(鷺に似てより大なる水鳥)の頭を刻んでいる一対の舟である。

その他白馬・白鹿・白蛇・白猿なども神のつかわしものとして異常異変に対する態度をあらわしている。雀・雉・燕・山鳥・<sup>なまず</sup>兎・<sup>どじょう</sup>鯰・鰻・泥鰌なども白いものがでると話題になる。

将来に対する「きざし」(前兆)しらせ(前表)はト占や呪術とおたがいに関連したであろう。怪(さが)・兆(きざし)には凶兆の意味があり、「さが」には悪い兆があるが、吉兆は「よきさが」で、祥である。「げん」(験)も「前兆」で、「げんがよい」「げんがわるい」となる。

凶兆をきらい、吉兆をよろこぶ、期待・豫告はよい方がよい。願望は吉兆である。凶兆に対してはその害をうけないようにタブー(禁忌)を持つに至る。ト

占は神仏の意を伺うたものにもなる。陰陽道の流入はこうして、重大な意義をもつことになった。

中国道教の信仰は陰陽道<sup>おんみょう</sup>としてわが国に流入し、皇天上帝・三極大君・日月星辰・司命司籍・東王父・西王母・五方五帝など道教の神々がはいってくる。日月星辰の中、青竜・朱雀・白虎・玄武の四者を四神<sup>あが</sup>として崇めた。28宿中東方の七星座をつなぐと、その形が南を頭にして、北を尾として横たわっている蛇に見えるので竜とする。南方の七星座は鳥の形に思えるので、これを鳥とし、西方の七星座は虎に見えるのでこれを虎とした。北方の七星座は亀に見えるので亀とした。これを28宿の星の精とし、青・赤・黄・白・黒の五色を東・南・中央・西・北に配する五行思想に基いて、東方を青竜、南方を朱雀、西方を白虎・北方を玄武とした。亀をとくに玄武というのは、亀が堅甲を有して、よく敵の攻撃を防禦しうるからで、玄武の像は蛇が亀にまきついて攻撃し、亀がこれを防禦している図である。武は「戈」を「止」める意で、戈と止の合字からなっている。四神の玄武は北辰で、これを玄武上帝ともいう。玄武像にあらわれた蛇と亀を道教では神の使として崇教した。高松塚古墳にもこの四神が石廊内部にかかれている。

こうした陰陽道<sup>おんみょう</sup>の影響下にわが国でも早くから四神が防禦・防衛の守りとして重んぜられた。

この点からいっても青竜・朱雀・白虎・玄武が重んぜられ、その系統からいっても竜や虎や亀が画題になるに至ったと思われる。

## 七、吉祥思想の推移とその表現

古代的な吉祥観は、中世になってもつづいているが、多少の推移と変化が伺える。

まず元号によって考えて見よう。平安末期には永観・寿永など「永」をつけたものが多い。長徳・長久・長寛などもある。いや永かれと希望はしたが、皮肉にも案外長くはつづいてはいない。瑞祥の文字を選んでも朝三暮四で持続しな

## 福德思想の発生と吉祥への願望

かったのである。

鎌倉時代には「建」の字が多い。建久・建仁・建暦・建保・建長・建治の如し。建久は国を安んじ、民を利し、長久の計を建てるというのである。(晋書)建仁は仁策を建てるから来ている。建永は永世の業を建てる(文選。)なんでも確立・建設を欣求している。不安の世では「建」がのぞまれた。

瑞祥とし、理想とするところは常に時勢粧をあらわしている。既に室町・江戸時代の元号については考察しておいた。

元号から見ても各時代の理想どするところがちがうが、それと同じく古代と中世とで吉祥にも自ら異なるものがあるに至る。いわば古代の吉祥は国家鎮護の公的生活にかかわりをもち、のちに次第に私的生活のものになる。

奈良時代すでに神仙観からする神仙・蓬萊の欣求の思想があり、仙島に憧憬し、不老不死の常世国を夢想したが、これも次第に現在謳歌のものとなり、憂き世よりも現世的な浮世をたのしみ、その物質的欲求をみたそうとする。浦島伝説の龍宮からはまた帰り来らねばならない。

数は抽象的だが、その神秘性のゆえに忌みきらうことがある。キリスト教国では13をきらう。しかし日本の場合はむしろ語感からくる縁起によることがある。4・9は死・苦に通じるから縁起をかつぐ。

日本では中国風にならって奇数をもってめでたしとする風習がある。1・3・5・9の数をよろこぶ。7・5・3もめでたがる。竹林の七賢人、七福神も画題となる。5では5菓(桃・梨子・棗・栗・杏)の果実を画題とする。贈答のとき偶数をさける。おそらく「われる」からであろう。しかし2個の場合は1対でよいし、8は末広がりで慶事にはつかわれる。中国唐時代には「飲中八仙」の画題もあり、瀟湘八景もあったが、わが国でも南都八景・近江八景・吾妻八景みなめでたい画題となる。

室町時代の伊勢・小笠原両流から2つの数をめでたがるようになる。物に陰と陽があり、夫婦も2人であるから2を不吉の数とはいわれぬとする。そして掛軸も「3幅対」に対し「2幅対」になる。尉姥は古夫婦でめでたいし、婚礼の犬張子も2つからなる。水引も2本掛けだし、夷大黒は2つならぶ。鶴亀も2つである。



しかし矢張奇数はよく、教奇を好むことになる。3はめでたく、三々九度も3日帰りも3である。歳寒三友としての松竹梅も3である。これは物事に等級をつける考え方にもよろう。小笠原流ではすべて真、行、草の三等級にする。

真は貴人や目上の人に対する礼、行は自己と同等のものに対する礼、草は目下のものに対する礼である。

家の構造にも真行草があり、床の間や違い棚にも、軸装にも真行草があり、三具足(花瓶・香炉・燭台)・違棚の飾りがある。

庭園にも池泉・築山庭・平庭に真行草があり、饗膳にも真行草の儀式がある。これは室町時代からの傾向であるが、江戸時代からますます形式化した。

松竹梅は歳寒の三友として喜ばれる。寒によくたえるので、特に慶事には不可欠となる。かつて「平家物語」では蓬萊山を松と鶴亀を三要素としていたが、のちに竹が加わる。

松には二葉松あり、五葉松があつて、五葉松をめでたいとする。松柏科は常盤木で、常緑として長寿をあらわす。とくに和歌や俳諧の季題として特定の季をもたない。また神木として<sup>ようごう</sup>影向の松にもなる。

松には老樹・名木も多い。高砂の松・住吉の松・唐崎の松が知られ、三保の松原・天の橋立・舞子の松原・筑前の千代の松原・唐津の虹の松原など歌枕となり、画題ともなる。謡曲には「高砂」「羽衣」「老松」「松風」があつて、とくに「高砂」はめでたく、画題にもなる。「松尽し」に次のようなものがある。これも大黒舞の文句である。「歌い囃せや大黒の1本目には池の松、2本目には庭の松、3本目には下り松、4本目には志賀の松、5本目には五葉の松、6つ昔は高砂の尾上の松や曾根の松、7本目には姫小松、8本目には浜の松、9つ小松を植え並べ、10でとおとおの伊勢の松、この松は芙蓉の松にて情有、馬の松が枝に口説けば靡く相生の松、またいついつの約束に、日を待つ時待つ暮を待つ、連理の松に契りをこめて福大黒を見さいな……」。また五葉の松より始末(しまつ)かめでたいといったりする。

梅は渡来品だが、古くは白梅が、のちには紅梅が珍重される。歳寒の寂莫を破って百花の魁として発祥の意を重ぜられた。しかし、恒久不変の意義が発露さ

## 福德思想の発生と吉祥への願望

れないので、梅が蓬萊山に加わるのはおくれて江戸期になってからだろう。

竹には「竹取物語」の説話があり、竹は直節にして君子の風があり、その実は鳳凰の食となると伝える。そのしなやかな弾力性が道学的にも好まれる。

「近世叢話」(角田簡)に「松に太夫の節あり、雪に宜しく、風に宜し。竹に婦女の操あり、露に宜しく、雨に宜し」とある。新年のデコレーションとしていまも重視されている。平安期までは松竹梅を個々にかいたが、鎌倉期から室町期にかけて同一面にかいて吉祥文にする。元禄期から松竹梅と連称し、鶴亀を加えて松竹梅紋があらわれる。

こうした古典的な松竹梅はそのまま庶民の中にも浸透し、尊重されている。正月の町家には松竹梅の盆栽がかざられる。歌舞伎でも曾我狂言の「対面」、「矢の根」、「草摺引」の舞台には梅があり、釣り枝も梅になっている。歌舞伎の主たる花は桜になっても、松竹梅のめでたさはかわらない。「菅原伝授手習鑑」の三つ子は梅王・松王・桜丸である。

「雪月花」もまためでたい画題になっていた。

雪月花によせる心はすでに古く「万葉集」の頃まで遡られるであろう。かつて古代においては神意を伝えるものの予知として雪月花は生活とつながっていた。

雪は豊年をあらわし、米の花につながる。月は生命力、不死願望の対象となり、花は開花期の長さで豊年を予知するものとされた。しかもやがて自然を美的に観賞し、四季の中でもっとも美しいものとして雪月花を見るようになる。大伴家持は「新しき年の始の初春、今日降る雪のいや重<sup>し</sup>け吉<sup>よごと</sup>事」とよんでいるが、これは雪を初春の表徴としている。古くは「万葉集」では花は梅であったが、「古今集」では桜になる。

日本の歌は「寄物陳思」で、花鳥風月によせて自己の感情をあらわしたが、そこには季節感が基底にあった。鳥や風、花にも月にも季節がつきまとう。しかし雪月花の場合には四季を超越したところがある。

もとより雪月花には雪見・月見・花見というように、人々がよりあってながめ、饗宴をとまなう例があった。雪が降り、月が満ち、花が咲くのを見るのだ

が、のちには雪は消え、月は欠け、花は散ることに思いが寄せられた。草庵から観賞し、佗の境地のものになる。それは季節を超えたものにもなるし、近世になると諸芸能にとり入れられ、雪月花こそ風雅の道と考えられ、茶道はとくにこれをすすめる。手習いの文字にもなる。

花道の中に生花<sup>しょうか</sup>が登場すると、更に雪月花が重んぜられるが、千家など茶道では花月が中心になる。雪は豊年のしるしとして、好まれたが、きびしい雪は大平ムードから脱落していく。

月をめでたしとする心性に対し太陽はどうか。

日は月にひして日本人はあまりとりあげない。しかし朝日夕陽の美しさには心ひかれるものがあつたろう。朝日の昇天は雄大で瑞気にみちていよう。落日には早くから日想観の信仰があり、西方浄土へのあこがれが落日の美事さにむすびつく。しかし矢張吉祥としては、旭にしくものはないことになる。朝日ののぼる雄姿を海のかなたに拝する構図は町人社会でもとくに好まれたし、立身出世の勢を示す。正月の掛物としてなくてはかなわぬものとなる。二見岩の背景も旭日で、正月の掛物にふさわしい。

## 八、吉祥芸術の諸課題とその存立理由

松竹梅の外、花では桃が邪気を払う呪力ありとの信仰が中国より伝えられ、多寿をあらわす西王母には桃を配しているが、この桃は三千歳に花咲くとされる。

のち桜は梅花鑑賞に代って一般化し「桜狩」の遊びが行われる。とりわけ庶民の愛するものとなり、河東節の「助六所縁江戸桜」江戸長唄「京鹿子娘道成寺」など所作事で桜に因んだものが多くなる。桜は歌舞伎の花を代表する。「娘道成寺」「義経千本桜」「将門」「楼門五三桐」の南禅寺「白浪五人男」の鎌倉極楽寺「鏡山」など花の雲と関連している。

四君子は梅・竹・蘭・菊で、明清の南宋文人画の画題であって、竹は直線的、蘭は曲線的、梅と菊は直曲の両線的な大体の形で構成されている。六君子は松・柏・槐・榆・梓・梅を呼ぶ。中世までは中国文化の影響下にあって、マツとウ

## 福德思想の発生と吉祥への願望

メが権力者の御殿をかざるものであり、これに牡丹が加わった。狩野家の人々の画材はこうした所にあった。嵯峨大覚寺の宸殿の障屏画を見てもこのことがわかる。大和絵の伝統の中でもウメにマツよりも、サクラにカエデになってくる。

四愛は梅・蘭・蓮・菊をいう。梅は林和靖、蓮は周茂叔、蘭は黄山谷、菊は陶淵明の愛したところである。四友は松・梅・蘭・竹で、雪中開花の玉椿・臘梅・水仙・山茶花<sup>ササキ</sup>を指すこともあった。また南天・牡丹・ザクロも尊重される。

南天は難転の音通でゲンがよい。牡丹は花の富貴なるもの、歌舞伎でも桜についで多く使われる。獅子物にはなくてはならぬ小道具が牡丹で、牡丹に唐獅子、竹に虎と尻取り歌にもある。牡丹を百花の王、獅子を百獣の王とよんだことに由来する。盆に吊る燈籠も牡丹燈籠であるが、これは少し縁起はよくない。

牡丹について、菊は、「鬼一法眼三略巻」すなわち菊畑にも咲いている。中国の故事<sup>コトワザ</sup>からとった「菊慈童」もある。ザクロはイチジクの文様・ブドウの文様とともに多産豊饒のシンボルになる。多くの実を結ぶのである。ザクロはインドの鬼子母神の伝説と混合する。オリエントの植物文様としてのブドウは東へのびて仏教界のブドウ唐草となるが、日本ではブドウは忌まれた向もある。なり下るのを嫌う。音通をいむのは北をいんで北向・北枕をいやがるのに通じる。北は敗北の北でにげることになる。椿は時に縁起が悪いとされる。ぽたりと花がおちるし、椿の木がもと座女<sup>ミコ</sup>のもつものであったからでもある。

動物では鴛鴦は雌雄の中むつまじく、家内円満の象をあらわす。「鴛鴦の契」といって羽を交わして臥したさまを「おしの衾<sup>ふすま</sup>」とよんだ。めでたい画題になる。鴛は一陽来福を示す。総じて赤色は陽気でめでたい象徴となる。鯛は桜鯛として色がめでたいの語呂あわせをよろこぶ。エビも伊勢エビはいせいよしに通じるが、また赤色で、縁起がよく、腰がまがり長寿をあらわす。鯉魚は勝負に勝つ魚として歓迎され、鯉魚節は勝男武士に通じる。鰯<sup>ぶり</sup>は出世魚として縁起がよい。蛤は陰陽和合で、貝の合したのを、夫婦和合に擬している。

鶴は千年、亀は万年の長寿をあらわし、吉祥となる。謡曲「鶴亀」には「亀は万年の齡を経、鶴も千代をや重ねけん」とある。亀甲は六角形の幾何学的模様で、

吉祥模様となる。平安時代には鶴亀と松、鎌倉時代には梅、室町時代には竹が加えられ、江戸時代にもこれがめでたい模様になる。太古は鹿占であったが、のち亀卜が行われ、亀の甲を焼いてその亀裂を見て真相を察知したが、これにもとづくのかもしれない。

しかし町家、商人間では亀は両手があわず、取引上の「手打ち」が出来ないから、これを忌む向もあった。

「のぼり龍」は立身出世をあらわし、「鯉の滝のぼり」も縁起のよいものとなる。謡曲「西王母」には「天仙理王」の来臨なれば、数々の「孔雀」「鳳凰」「迦陵頻伽」が飛びめぐりとある。鳳凰・麒麟・竜など朝廷の礼服から庶民の向にもひろがる。唐獅子は牡丹とともに友禅など嫁入の蒲団柄になる。蝶は雄蝶・雌蝶と婚礼の銚子につけられるが、蝶自体はひらひらとして魂の去来を感じさせるので縁起が悪いとする向もあった。音通からくるものとしては鹿がある。刀掛に鹿角を用いるのは外観上勇ましくもあるからであるが、実は鹿は「禄」に音通だからである。武士は俸禄を重んじたからである。<sup>こうもり</sup>蝙蝠と鹿の図を好むのも福禄の「ふく」「ろく」に通じるからである。

蝙蝠・鹿・寿老人を描いて、福禄寿を示すこともあった。

太古には鹿占すなわち鹿の肩胛骨を焼いて、その亀裂を察知したが、その関係もあって、鹿はめでたいものになったのかも知れない。

梅に鶯、紅葉に鹿、牡丹と唐獅子、竹に虎、柳に燕、竹に雀などはみな好画題であるが、昔からこのんで描かれるものは取合せがいかにふさわしく、まためでたいものになっている。花札の絵はこれを典型的に示している。松に鶴、梅に鶯、杜若に八つ橋、牡丹に胡蝶、萩に猪、紅葉に鹿、柳に燕、桐に鳳凰などである。

「一富士、二鷹、三茄子」はめでたい夢の順序を並べたものと思われる。夢で吉凶を判断する夢祥はすでに垂仁紀に「夢祥」によって立太子を定めている例が見える。夢判じ、それが季題として固定したものが初夢であろう。正月2日に宝船の絵を枕下においてねる習慣がある。年のはじめに舟に米俵を積む図があ

## 福德思想の発生と吉祥への願望

る。「稲積」の音通から、良い夢はつなぎ、悪い夢は水に流すという縁で船をかい  
ている。民間では、七福神や宝船をかくが、「一富士・二鷹・三茄子」もかく。「嬉  
遊笑覧」に富士は高大なるをよろこび、鷹はうちつかみとる意、茄子は「なすな  
る」にて成るの意を祝ったものとしている。かくて富士も鷹も茄子もめでたい吉  
兆の画題となる。

古代オリエントの唐草模様は、葦草がからみあってはいまわる図案化で、緑  
色の模様は嫁入道具の「ゆたん」にかかせないものとなる。雲鶴・立涌・小菱・  
菱・櫛も有職模様として珍重されたし、青海波紋も吉祥的波紋となる。青海波  
は西域地方の風俗舞が日本に伝わり、改作されて雅楽となる。この舞人の下襲<sup>したかさね</sup>  
の文様で、鱗形の波紋を四方へ連ねる。平静な海面をあらわし、四面波静かな  
る平安をあらわしている。四神文・蓬萊文も吉祥をあらわしている。吉祥天文  
は吉慶・瑞祥を象徴している文様で、富貴・長寿・子孫繁栄をあらわしている。

初春の厄払い尽しにも福德円満の願望がある。近松の「雪女五枚羽子板」に厄  
払い尽しがある。

「やあらめでたや、こなたの御寿命申さば、鶴は千年、亀は万年、浦島太郎が  
八千歳、東方朔が九千歳、西王母が桃の核<sup>さね</sup>、猿豆、小豆、親もまめどり、雛ど  
りの羽度重ねに宝は集まる。家は治まる持丸<sup>もちまる</sup>長者の四方に四万の蔵の戸前の明  
けゆく年から、福神たちの御影向<sup>ようこう</sup>、一に市姫弁財天女、二に西の宮若恵比寿殿、  
三は三面大黒頭巾の襲<sup>ひだ</sup>の数々は12ヶ月は、無病息災、その身は鉄槌打出の小槌<sup>かねづち</sup>、  
打った打出す金銭、福德円満、悪魔外道、打払うて西の海へさらりさらりさつ  
さつと、こきやこう」

結局福祿寿ともに長寿の願いがこめられている。もっともポピュラーな厄お  
としをあげよう。

「今晚今宵の御祝儀に、めでたい尽しで払いましょう。鶴は千年、亀は万年、  
東方朔は八千年、浦島太郎は三千年、三浦の大介百六つ。かかるめでたき折柄  
に、いかなる悪魔が来たるとも、西の浦へさらり」

結局長寿の謳賀、願望であるといえる。

人物では七福神の外、吉祥天を好む。吉祥天はインドの女神、毘沙門天の后で美しい天衣をまとい福德を司る守護神である。「西王母」もまた謡曲の普及とともに庶民の間に親しまれる。三千歳に花咲き実生なる、西王母の園の桃である。西王母は女仙で、姓は楊、名は回、周の穆王が西に巡狩してコンロンに遊び、西王母に会い、帰るのを忘れたという。また漢の武帝が長生を願っていた際、西王母は天上から降り、仙桃七顆を与えたと伝える。

その他、浦島太郎もよろこばれた。

先にのべた歳寒三友(松・竹・梅)は文人趣味にあい、その外、枯木竹石(枯木・竹・石)、天香玉兔(桂花・兎)一路栄華(鷺・芙蓉)喜占春魁(梅・鵲)風月三世(蓮の根・葉・花・実)名花十二客(牡丹・桂花・バラ外)なども継語として、しばしばテーマになる。それらは文人趣味でもあった。

文人墨客は山水図や花鳥画を好んだが、町人からの注文によって製作する必要もあり、その好みに合わせていく必要があった。日常生活の理想を具現するような掛物・屏風・置物を床の間や座敷にかざりならべるための需要に応ずるため、自然と吉祥・福德思想をもったものをつくることになる。

大阪には木村兼葭堂、与謝蕪村、松村月溪(呉春)、十時梅厓、岡田米山人、岡田半江などあまたの文人画家が輩出しているが、森狙仙一徹山とつづき森一鳳が出る。その得意とする「舟人が藻を刈る図」は大阪商人のもっとも好むところとなり、「藻刈る一鳳」を称し、「儲かる一方」に音通なので、注文が殺到したということである。このような同音吉祥、ごろあわせに類する画題も少なくない。

「子蛙をせおった蛙」などそれで、「こうてかえる」に通じ、商人のよろこぶところであり、それを型であらわした陶器、工芸品も多い。

先にもいったように、蝙蝠・鹿・寿老人を描き、福祿寿をあらわすものもあり、同音の事物を假托する音通である。

もとより文人画家は野党精神をもち、反俗性を尊ぶが、売り絵描きでないにしても、縁をたより諸門の富豪宅をめぐり、食客となり、旦那連に文人画の手ほどきもしたし、そのニードの絵もかくので、自然と、吉祥の絵画に筆をとらざる

## 福德思想の発生と吉祥への願望

を得なくなる。例えば大阪の文人画家岡田米山人にも「松齡鶴算図」や「仙桃図」「寿老人図」「松竹梅図」「若恵比須図」「老松双鶴図」があり、岡田半江にも「若恵比寿図」「仙齡祝寿図」(双鶴)などもある。

日本の絵画は絵解きの役割をもって発達し、文学と協力するところが大きかった。絵巻物は正にそれで、説話とも結びついていて、また絵画には宗教性がとけあっていた。信仰を離れた絵画はなく、芸能はなかった。「松竹梅」も「雪月花」も単なる自然現象ではなく、文学的情念や信仰的要素が投影されていた。また「賛」がとくに水墨画には欠くことが出来ず、「賛」の詩情が付加されていた。「詩画軸」はそれである。俳画またしかり。禅画における白隠・仙崖もそうである。

日本の美術・日本の芸能にはこうした文学性や宗教性ととともに発展したわけで、吉祥の芸術もまたこのジャンルに属した。賛を伴う絵、銘をつける茶碗は日本の特色である。西洋絵画あるいは現代絵画が純粋な絵画性を追求し、唯美性・装飾性に徹しようとするのと相当にひらきがある。

日本の芸術には元来単なる唯美主義・装飾主義の外に、歴史主義があり、意味主義があった。その背後に無限の意味をひそませる。そして心情的な理解が求められる。

ところが明治以降の日本は唯美主義や機能主義を受容し、そうした意味性を否定して来た。伝来の芸術・絵画・文様は陳腐なものとして好まれず、月並として扱われた。そのためこのような福德円満・吉祥の内容は次第に忘れられた。そして経済主義を離れるのが芸能であると考えられた。しかしこれまでの日本の芸能は何等かの意味内容や好みに合わせていく必要があったし、日常生活の理想、たとえば福德思想を具体化したような掛物や置き物を座敷にかざるニードから生れていた。そこにまた町人文化の庶民性があったわけである。日本民族における福德思想や吉祥願望の永き歴史を回顧して、日本文化の成長の過程とありようを究明したわけである。こうした日本的心性を無視してまで追い求めて来た近代は、はたしてこれでよいのか。近代的芸能はいま反省すべきところに来てはしまいか。



## 福德思想の発生と吉祥への願望

### (主要参考文献)

飯泉六郎編「喜怒哀楽語辞典」。「徒然草総索引」(時枝誠記)。川口謙二・池田政弘著「元号事典」。森末義彰「風俗辞典」。宮本又次「大阪の風俗」。宮本又次「大阪今昔」。大塚史学会「郷土史辞典」。社会思想社「日本を知る事典」。秋山謙蔵「日支交渉史話」。秋山謙蔵「徒然草と支那錢の流通」(「日支交渉史話」)。宮本又次「理想郷と海洋思想」(「あきなひと商人」)。鈴木進「蕪村の俳画と文人画」(額川美術館、昭和52・春秋号)。宮本又次「福德思想と吉祥芸術」(額川美術館、昭和52・秋季)。吉田光邦「日本の文様とサクラ」(「日本自身」第1巻4号)。戸板康二「歌舞伎の花」(「日本自身」第1巻4号52年6月)。林屋辰三郎「雪月花の思想」(「近世伝統文化論」)。瀧川政次郎「律令諸制及び令外官の研究」(「法制史論叢第四冊」)。瀧川政次郎「画工司・国画師の職制を論じて合戦絵・祥瑞絵・偃側図絵等の起源に及ぶ」(「律令諸制及び令外官の研究」法制史論叢第4冊)。中村直勝「荒説日本史」(上・中・下)。魚澄惣五郎「京都史話」。歴史学研究会編「民族の文化について」。宮本又次「十日戎と大阪町人」(「大阪大学経済学」、35年1月)。宮本又次「日本封建主義の再出発」。民俗学研究所編「民俗学辞典」。中村直勝「経済史観日本」(上巻)。中村直勝「日本想芸史」。長沼賢海「福神二説・恵比寿と大黒」。